

「シートン動物記」の作者アーネスト・トンプソン・シートンがベーテン・パウエルとは知り合いであったことは書いておきたい。

彼らは互いに、良くも悪くも影響しあう仲であった。

後にシートンは米国ボーイスカウト連盟の総長になっているがその後、パウエルとは袂を分かつことになる。それはなぜか。

森の中のインティアンゴッコを楽しむシートンと軍隊的秩序と統制好きのパウエルではノリが合わなかったらしい。

スカウトの各班名はクマとかシカとかウサギという動物名がついているが、これがシートンのアイデアであることは意外と知られていない。

シートンはその後、ボーイスカウトの元々のアイデアであるウツドクラフトの理念と方法をベーテン・パウエル及びBSAに盗用されたとして訴訟を起こしている。

ボーイスカウトなんてボランティアは、少年の情熱を持ち続けることの出来る大人でなければ出来る物では無いと思うが、この大元締めの人二人がかなり感情的にやり合った様子が想像できて可笑しい。

結局ベーテン・パウエルのやり方を批判したシートンが去っていく形になるのであるが、現在日本のボーイスカウトの内容はかなりシートン寄りであると言える。

そうでなければ人が集まらない。

ロープ結びを習ったり。木から木へ張った綱を渡ったり。どんぐりでおもちゃを作ったり。竹林の中で竹馬を作ったり。竹の棒にホットケーキを巻き付けて焼いたり。石釜を作ってパンを焼いたり。餅つきをしたり。

山登りをした後お母様たちの手作りトン汁で体を温めるのは幸せらしい。

夜間ハイク、夜中の二時頃やっとたどり着いた広場で、一杯ずつ渡されるカップラーメンを共に歩いた仲間たちと片寄せあってすするのは最高らしい。

その生き立ちからか、ボーイスカウトは軍隊的であるとか、管理的であるとか批判のご意見もあるようだけれど、中で活動している子ども達が自然と戯れることを楽しんでいることが何よりである。

シートンは、日本では動物小説の作家として有名だが、カナダやアメリカでは、ボーイスカウト運動を立ち上げた功績の方が知られている。もっとも、ボーイスカウトの創始者は、イギリス人、ボーテン=ハウエルで、その発想は、少年を「スカウト」、つまり「斥候兵」として役立つよう訓練することだった。

20世紀初め、ボーイスカウトがアメリカに伝わったとき、そこに、ボーイスカウトならではの「野外生活の楽しみ」を盛り込んだのは、実はシートンだったのである。当時、シートンが立ち上げていた少年たちの野外活動組織「森技インティアン連盟」は、全米に広がり、シートンは子どもたちにカリスマ的な人気があった。1910年にアメリカ・ボーイスカウト連盟が発足したときには、初代総団長に選ばれている。

その頃、多くの人たちは、社会というものは未開・野蛮な社会から文明社会へと「進化」し、工業化された社会こそが最高だと考えていた。それに対して、「いや、それは違うだろう」と、異を唱えたのがシートンだ。「人々の心の豊かさ」や、「自然との調和」という尺度で測れば、インディアンの社会こそ最高だと、シートンは主張した。インティアンがそのように精神的にも肉体的にも優れていたのは、大自然の中で生活したからであり、青少年を立派な人間に育てるには、インティアンに倣った野外生活を経験させるのが一番だ、というのがシートンの考えだった。当時としてはとても異色の考え方だった。

インティアンと手話で話すシートン。平原インディアンの間では異なる部族間のコミュニケーションの手段として手話が発達。シートンはインティアンの手話のハウツー本も書いている

シートンが、実在の先住民と初めて付き合ったのも、カナダだった。彼は、チャスカという名の、クリー族の狩人だった。シートンが、マニトバ州カーベリー周辺でシカを狩っていたときにチャスカに出会ったいきさつや、その後の付き合いについては、『サンド・ヒル牡鹿の足跡』にも、シートンの自叙伝にも記されている。

チャスカは、6尺豊かな、ワシ鼻の偉丈夫で、長い黒髪を2本の編み下げにして垂らしていた。森技に長じ、野

生動物の知識も豊富で、シートンは彼から様々なことを学んだ。つまり、チャスカは、シートンが子どもの頃から憧れてきたタイプのインディアン、『モヒカン族の最後』に出てくるような、カッコいいインディアンだったのだ。小説や空想ではない、現実の先住民、チャスカと、マニトバで出会ったことこそが、シートンのインディアンへの畏敬を決定的にしたと考えられる。

アメリカで名を上げ、後半生をアメリカで過ごしたシートン。しかし、これまで見てきたように、博物学者・文学者・野外活動の指導者としてのシートンを育てたのは、カナダの自然だったのである。

ボーイスカウトの歴史を知ろう

シートンとB-Pのお話

「シートン動物記」で有名なシートンは1900年、アメリカ合衆国ニューヨーク郊外の自分の農場に少年を集め、「**ウッドクラフト・インディアンズ**」と名付けた森林生活を取り入れたキャンプをB-Pがブラウンシー島で実験キャンプを行うより7年前に実施していました。

シートンは、その内にボーイスカウト運動がイギリスからアメリカ合衆国に広がり、シートンはウッドクラフト・インディアンズの組織を率いてボーイスカウト活動に加わりました。

1910年創立されたボーイスカウトアメリカ連盟の初代連盟長にシートンが就任しました。

ボーイスカウトアメリカ連盟のハンドブックは、シートンとB-Pの共著として出版されました。

スカウトの各班名はクマとかシカとかウサギという動物名がついているが、これがシートンのアイデアであることは意外と知られていませんね(*^-^*)

そして、ボーイスカウトならではの「野外生活の楽しみ」を盛り込んだのは、実はシートンだったのです、シートンもこの運動に貢献した一人なのです。

しかし、シートンとB-Pは、考え方の違いで袂を分かつことになりました。

今の日本のボーイスカウトはシートン寄りのスカウティングです。